令和５年度第１回島根県幼児教育推進協議会　議事概要

日時：令和５年 11 月 29 日（水）14:00～16:00

会場：サンラポーむらくも　興雲の間

出席者

○委　員：小山　優子　座長（公立大学法人島根県立大学人間文化学部　教授）
金山　由美子　委員（島根県国公立幼稚園・こども園長会　会長）
西谷　正文　委員（島根県私立幼稚園連合会　理事長）
川上　雅文　委員（荒茅保育園　園長）
相山　慈　委員（認定こども園あさりこども園　園長）
塩満　恭子　委員（認定こども園神田保育園　園長）
今岡　篤子　委員（島根県幼児教育研究会　会長）
玉木　康之　委員（島根県小学校長会　会長）
長岡　和志　委員（松江市保育所（園）保護者会連合会　会長）
澤田　真理子　委員（松江市こども子育て部こども政策課　保育指導官）
森脇　真理子　委員（大田市健康福祉部子ども保育課　課長補佐）
八束　政義　委員（島根県教育庁特別支援教育課　課長）

○事務局：石橋　裕子（島根県教育庁教育指導課幼児教育推進室　室長）
高田　純子（島根県教育庁教育指導課幼児教育推進室　企画幹）
八木　優（島根県教育庁教育指導課幼児教育推進室　指導主事）
富田　美紀（島根県健康福祉部子ども・子育て支援課　課長補佐）
安達　庸（島根県健康福祉部子ども・子育て支援課　主幹）
渡邊　紀子（島根県健康福祉部子ども・子育て支援課　主任）

１　開会

・挨拶（石橋　幼児教育推進室長）
・自己紹介

２　議題

（１）島根県幼児教育推進協議会の設置について
・島根県幼児教育推進協議会の設置について　資料１
・会議の公開の取扱いについて（案）　資料２
（２）島根県幼児教育センターのこれまでの取組について　資料３
（３）幼児教育振興プログラム改訂の概要について　資料４
（４）今後のスケジュール等について　資料５

３　島根県における幼児教育の現状や、次期幼児教育振興プログラムに盛り込むべき内容、今後の進むべき方向等について意見交換

（委員）

・訪問指導の予算確保、人材確保が難しいとのことだったが、県としての今後の見通しはどうなのか。

（事務局）

・今、全ての市町村に幼児教育アドバイザーがいる状況ではないが、それぞれの市町村でされているアドバイザーの任用は、人材確保が難しいとは聞いている。県では、新規採用幼稚園教諭の研修指導員を任用しているが、これも人材確保に苦慮しており、どなたかご推薦いただけるとありがたい。

（委員）

・昨年度に保育３団体で県議会と知事に対して、「未就学児への支援体制と保幼小連携の構築について、島根県内の現状は、未就学児に対して関係機関との連携がとれているとは言い難く、保育施設としても、各所へ情報提供や相談を行っておりますが、関係機関同士での情報共有がされていない場合もあり、結果的に就学時に問題となることがある。こうした問題を早期に解決するため、教育委員会、児童相談所、市担当課あるいは支援事業所等との情報共有、連携を行っていただき、円滑な支援、連携体制を構築してください。」と、陳情したが、連携の状況は未だ市町村によってばらつきがあると思うので、今後県としても連携が進むようお願いしたい。

・障がいがあり、保護者が障がいを認めているお子さんは、小学校入学後、指導する方向がある程度決まっているが、多動のお子さんで、親さんがそれを受け入れられないと、教育相談につながらない。保護者にお子さんの実態をご理解いただくのが一番難しく、保育所は対応に苦慮している。そういったお子さんは入学後、集団に馴染めなかったりするので、今後の幼小連携のところでは、課題として入れていただきたい。

（事務局）

・特別な配慮が必要な子どもたちにどう関わっていけばいいのか、市町村でも本当に苦慮しておられる。それも含めて、県としてもできることを考えなければいけない。そのために今回、特別支援教育課長を委員に加え、幼児教育振興プログラムにもしっかり組み入れるよう、幼児教育における有効な特別支援のあり方について議論していきたい。

（委員）

・県の教育委員会としては、市町村の教育委員会の就学支援担当者に対し、各市町村の保健部局・福祉部局との連携をお願いしており、幼児教育の中で支援が必要な子どもさんの情報は、教育委員会の方にもいくようになっている。

・市町村によって格差はあると思うが、県へ来ている回答では、全ての市町村で連携していることになっている。連携の中身までは十分把握できていない。

・また、特別支援学校がセンター的機能を担い、幼児教育も含めて、要請に応じて教育相談を行っているので、お近くの特別支援学校に相談してほしい。また、市町村で教育相

談ができないかということについては、持ち帰って市町村教育委員会と話をしたい。

（委員）

・これまでの取り組み実績を報告いただいたが、県全体ではなく、例えば県内の東部と西部で幼児教育の推進が同じように進んでいるのか、それとも若干違いがあるのか、把握しておられることがあれば教えてほしい。

（事務局）

・基本的には、市町村の幼児教育アドバイザーが訪問指導されているが、アドバイザーがおられない市町村では、県に訪問指導の要請がある。施設からの要請件数が東部と西部でどちらが多いのか、はっきりと大きな違いがあるわけではないが、地域差はあると感じている。

・県としては、市町村の幼児教育アドバイザーの方が保育の状況を把握され、そこに県の同行支援が必要ということになれば協力する。また、県で開催しているアドバイザー合同研修等を通して、各市町村の訪問指導の充実を図っている。

（委員）

・先ほど幼児教育実態調査の結果から、幼小連携接続の現状について報告があったが、この調査がなされたのが令和元年、2、3 年と、コロナ禍の最中である。私の園も以前から地元の小学校との連携はしていたが、コロナでできなくなった。5 類になったということで、これから再スタートしていく。先日も小学校の学習発表会のリハーサルを見に行った。また、以前からカリキュラムも作っていこうと話をしていたが、それができていないので、これから進むのではないか。ステップ 3、4 はこれからという期待を持っている。

・以前は一つ一つの施設に県の幼児教育アドバイザーの方が来て指導いただいていたが、それが複数の園がまとまって、そこへ来ていただくように変わった。各園それぞれの状況があり、まとまって実施というのはやはり難しく、1 園ずつ訪問していただきたい。

・もう一つ、これからの方向性について、『幼児教育の質の向上』という言葉をよく使うが、どうなることが質の向上なのか。言葉を使うからには、何を狙っていくのかをある意味明確にしないといけない。

（事務局）

・架け橋期のカリキュラムを小学校区の中で、幼児教育施設と小学校と協働で作成しているかどうかについては、少ない状況である。もちろん交流は大事で、交流するべきと思っているが、接続を見通したカリキュラムの協働による作成が幼小連携の中では重要であると思っている。

・質の向上については、現プログラムの 8～10 ページのところで、めざす子ども像、それぞれの資質・能力が挙げられている。各市町村のアドバイザーの中でも、この資質・能力に向かい、例えば人間関係、遊び育つ姿の育成につながるような保育を目指してもらえるよう、しっかりと今後も関わっていきたい。

・今回のプログラム改訂により、一つの目安、いい意味での基準、物差しとなるようなも

のを作れるとよいと考えている。幼児教育の質の向上という言葉だけが漠然と独り歩きしないよう、どのようなものを提示した方がよいのか、委員の皆様のご意見をいただきたい。

（委員）

・幼小接続のカリキュラムは以前から作っており、それを実践しているが、それをやってどうだったのかというフィードバックができていないため、小学校へ送り出した後の様子が分からないままである。小学校とのフィードバックを夏休みくらいまでに 1 回でも行うと、より今後に幼・保育園でも生きてくると思う。

（委員）

・確かに、連携をやったということだけで、それが実際どうだったのかという検証はなかなかできていない。まずはスタート地点から連携を始めて、その後、ステップ 3、4 あたりで次にどのように進めていくか話し合うという視点はよいと思う。それをどのように説明できるのか、プログラムに反映させていくとよい。

（委員）

・最近現場に求められているのが、遅くまで預かる等、サービス面での向上が主であったため、質の向上という面に立ち止まってみんなで考えようというのは大変ありがたい。

・先般、全国の公立園長会があり、各都道府県の会長さん達とお話をした際、幼児教育プログラムに関して、他県では健康福祉部だけで進めているところが多いが、島根県は健康福祉部と県の教育委員会と二本立てで進めていることを話すと、島根県はいいねと言われ、心強く感じた。

・先ほどから話が出ている幼小連携の検証や、支援を要する子が増えているので、そういう子の支援の在り方の検証も含めて、一歩前に進む時だと思っている。

（委員）

・国から幼児教育振興プログラムや幼児教育アドバイザーの話などが出た際、そもそも予算はどうなるのか等、根本的な問題がよくわからないまま国から降りてきたという印象が強い。小学校や中学校は、公立が多いため、教育委員会において特別な支援が必要な子どもに関する連携など、動きやすいシステムができているが、幼児教育はそこまで保障もないまま、私立と公立があって、幼児教育アドバイザーの配置など、質の向上をうまく機能するような組織がなく、逆にそれを入れていこうというのが国の姿勢だと思うが、学校教育ほど充実していない中でどのように実際やっていくのか、都道府県に丸投げされたような感じである。

・市町村によってアドバイザーがいるところといないところがあり、県としては、その状態をどう思っておられるのか、市町村に任せっぱなしでいいのか、県の考え方を聞かせてほしい。

（事務局）

・先ほどお話がありましたように、複数園での申請というところでご苦労されたと思う。ただ、県の幼児教育センターのスタッフの人数では個別の施設の訪問指導ができる数

には限界があり、県からの直接の訪問指導の要請に制限をかけることをお願いしている。やはり幼児教育の現状、連携の様子などをよく把握されている市町村だからこそ丁寧に訪問指導できると考えており、市町村から情報をいただきながら県が行くよりも、市町村の方が訪問指導される方が何倍もその効果はあると思っている。県としては、各市町村の幼児教育アドバイザーまたは担当の方に対して、どのように支援ができるか検討をしているところである。

・例えば、特別支援教育のネットワークを生かして、それを土台に県の幼児教育センターと関わりながら、保育の質の向上にも取り組むなど、各市町村の状況によって、まず今一番取り組んでおられるところを活かしながら、どう関わるかが大事だと思っている。

・保育の質を上げるために、必ずアドバイザーの方が幼児教育施設に行き、指導をしてほしいということではなく、まずは幼児教育の実態を知っていただきたい。そのためには、例えば、市町村にアドバイザーはいないが、担当はいるという場合に、県の幼児教育センターの指導主事やアドバイザーが同行し、幼児教育施設の保育のこの視点がとても主体的な学び、遊びにつながっているというところ等をお伝えしながら、ご担当の方の保育の見る目を一緒に高めていきたい。幼児教育の質を高めるためには、まず市町村の担当の方々と県の連携が大事であると考えている。

（委員）

・幼児教育の振興の中で２つに分かれていると思うのが、１つが特別支援で、進学先も含めての連携接続の問題が今とても大きくなっており、地域で行政などいろいろな機関との関わりが重要となるが、それが市町村によってかなり充実しているところと、そうでないところの差があると思っており、それを県としてどうやって差を埋めていくのか、今後考えていただければありがたい。

・もう１つは保育の質で、その研修については、県が様々な研修会やオンデマンド動画の作成などをしており、そこを今後どのように、より深めていくのかになる。今は県がリーダーシップをとって質の向上と幼小連携に取り組んでいるが、特別支援については、様々な問題がかなり複雑に絡み合っているため難しく、幼児教育振興プログラムにもどう入れていくのかが課題である。

（委員）

・幼小連携について、今この場でこうするとは言いにくいが、特別支援学校のセンター的機能で、市町村の保健部局等と連携しているところだが、特別支援学校の地域は複数の市町村をまたぐため、関係する全ての市町村と一堂に会するのは難しい。それぞれの市町村の担当の方と個別に情報共有しながらやっていくことはできる。

（委員）

・最初の幼児教育振興プログラム策定から関わっているが、実際にこれを十分活用した５年間だったかというと、そこは自分も関わっておりながら十分活用できたとは言いがたいところもある。現場の保育士は忙しく負担が大きいのと、これだけ社会の状況が変わって、保育をどうしたらよいのか考え悩んでいる中で、益田市は訪問指導に入ってい

ただきアドバイスしてもらい、少しずつ質が向上してきていると思っている。今回のプログラムが各園で活用できるものになることを願っている。

・資料４で３つに絞るとあるが、内容を絞るのはよいと思う。いろいろな分野で働きかけないといけないことはたくさんがあるが、ある程度絞っていくのも大事で、現場に即したものになるとよい。

（委員）

・出雲市の幼稚園では、このプログラムをかなり活用させてもらった。配布された当時、園に 3 冊か 4 冊で、1 人 1 冊なかったため、自分用にして線を引いたり、付箋を貼ったりができず、園で大事なところを印刷して「ここ大事だよね」、「遊びの循環大事だよね」、「ひと・もの・こと大事だよね」と言って、それぞれが研究に取り入れたりして、ようやく浸透してきたところに改訂となり、もう少し浸透させたかったというのが本音。経験年数、規模、実態も違う園で、それぞれがこれを実践していくには、まだまだ年数が必要と感じている。

・今回のこの３つの視点について、現プログラムの大事にしなければならないところは活かした上で、3 つに絞っていく方がよい。せっかく浸透してきたところなので、今の土台を大事に、エキスは残してさらに方向性を明らかにしていくようなプログラムになると、私たちにとっては継続した形で実践していけるので良いと思う。

（委員）

・現在のプログラムの成果と課題が整理されていて、多分この重点が示されているのだと思うが、それが分からないので、現場での課題もあるだろうし、プログラムの課題もあるだろうし、そこが整理されていてこのような方向性になっているのであればいいと思う。

（事務局）

・そこのところについては、ぜひ委員の皆様のご意見をいただきたい。現場に生かすという点で大きくこの３つを挙げているが、先ほど委員がおっしゃったように、全てを変えるという意味ではなく、ここは大事というところは生かしていきたい。読みとくのに時間がかかるというよりも、それを実践に生かすために最低限必要なものを提示して、さらに園内の中で協議しながらよりよい保育を目指すという形もあると考える。お気づきの課題または、これはぜひ成果としてつなげたいということについて、皆さまのご意見がお聞きできるとありがたい。

（委員）

・皆さまからのお話を聞いて、まずこれを手に取った者としてはしっかりとこれを読み込まないといけないとあらためて思ったところ。私は幼稚園現場で多く勤めていたため、0 才からの発達の目安というところが言葉として新鮮だった。松江市には幼保園という施設があり、0 歳から就学前の子どもが通う園だが、幼保園で勤めていた時にそこの 0 才からの教育というか保育ですが、重要だと感じていた。それで０才児から子どもの育ちがつながって見えてくるということがとても新鮮であったし、保育協議の中の振り

返りでも、プログラムに目安が書いてあるので、どういった育ちが見えるかという話し合いにも生かせる。

・先ほど委員も言われたが、今のプログラムを土台にして、現場が生かすものにするためには、やはり実践の部分を踏まえたものがあると大変に参考になってよいと思う。

・また、松江市では、松江市幼児教育ビジョンという、保育施設に向けた質の向上に関わる指針となるものを今手掛けているが、やはり活用しやすい情報量というのが大事で、読みやすいことは大事だが、大切なことはたくさんあり、何をピックアップするかということで、今私自身も悩んでいるが、読み込むのが難しいところがあれば、ポイントポイントで分かりやすくなるとよいと思う。

（委員）

・基本的なめざす子ども像は、これが土台でよいと思っているが、重点化した研修内容としてやはり入るとよいと考えているものに、全国の私保連の大会の中でも必ずある内容であるが『食育の支援』である。それから『保護者支援』。今のプログラムにも「家庭における」とあるが、現場の中でも、保護者との接し方で苦労しており、保護者支援に対する関心は強く、研修も多い。また、出雲市保育協議会で近年取り上げているのは、子どもの視力が落ちているという問題で、そういった研修もしている。

（委員）

・受け入れる小学校という立場で話をさせていただくと、改訂の狙いで、幼児教育施設だけでなく教育関係者全てに周知する、ここが非常にポイントである。これまで幼小連携接続といっても熱心に語っていたのはおそらく幼児教育施設の方で、それを受け入れる小学校側としては、少し冷ややかだったと自分自身も反省している。

・一昨年ぐらいから、現場の小学校長の意識が変わってきたと感じている。それは、まず県の野津教育長が教育施策説明会で重点施策のトップに幼小連携接続を掲げられ、県でも市町でも、管理職向けの研修会を実施され、小学校でもこの幼小連携接続は大事だと、校長会の中でも意識が高まっている。

・管理職は徐々に意識が高まっているが、受け入れる担任の先生方にまでいかに落とし込むかということが小学校側の課題だと思っている。連携を進めることは、小学校にも非常にメリットがあると思っている。様々な園所から子どもたちが集まってくる中で、指導に苦慮している低学年の担任の先生方が、一昔前と違って最近多いと感じる。一方で、園所ではきちんと保育士さんや先生の指示で年長さんは行動できている。これがなぜ小学校に上がると、担任が指導に苦慮するのか。やはりその子どもの発達段階からの言葉がけなど、何か興味関心を引きつけるような何かしらのスキルがあり、小学校の先生が幼児教育施設に足を運び、実際にその現場を見て、どう声かけをしてどう関わっているかを生で見ることは、小学校教員のスキルアップに繋がると考えている。

・そういう意味で、この教育関係者全てに周知というのはとても大切なポイントであり、幼児教育施設だけでなく、特に小学校に新しいプログラムはきちんと周知し、さらに幼小連携接続が進むように声をかけていただきたい。

・また、配慮が必要な子どもについて、松江市では、気になる子どもがいたら入学前に園へ見に来てもらうシステムができており、実際に入学前に子どもさんの様子を見て、小学校に入学したらどういう支援ができるか考える機会としている。エスコという機関と連絡を取りながら、配慮の必要な子のスムースな就学につなげるようになっている。これは配慮の必要な子の接続に特化しているため、さらに同時に教育全体の取組みに広げる必要について、市の校長会で考え始めている。

（委員）

・大田市も幼児教育アドバイザーの人選が難しかったが、良い人に来ていただいた。今年度、公立・私立の全園で公開保育を実施したところ、園からはやってよかったと言われ、保育の質が向上できたと思っている。幼小連携についても夏休みに研修会を実施し、小学校の先生と保育士との話し合いができてとてもよかった。コロナ禍でできなかった実践もこれからはやっていきたい。

・アドバイザーは今年度 1 年目で、来年度は浜田教育事務所からの指導が受けられないことを大変不安に思っているため、引き続き県の方でご指導をお願いしたい。

・幼小連携のオンデマンド研修動画は、分かりやすくて良いものだと思うので、特に小学校の若い先生方に見てもらいたい。幼小連携の理解が深まると思うので、これからも県内に広く宣伝してほしい。

（委員）

・前回、山下由紀恵先生が座長をされて作られた現プログラムについて、良い実践をされている園が載っており、とても参考になるプログラムになっているが、一方で逆にわかりにくさ、読み取りにくさがあるため工夫が必要。また、良い保育実践例や幼小連携について、やはり地域差や、学校・園規模等によって連携の現状は違ってくるが、良い実践が載っていると思うので、そのエッセンスをぜひ継承してやっていただく内容にしていただければありがたい。

・島根県は、保育所と幼稚園、福祉部局と教育部局がかなり連携しており、特別支援教育も熱心に取り組まれ、また保育の質の向上に向けてよい実践をされている先生がたくさんおられる。そのような現場の先生方がこのたび委員に選抜されていることから、プログラムもより実際に生きる形に改訂できると思っているので、皆さまには忌憚のないご意見をたくさん頂きたい。

４　閉会

・お礼の挨拶（石橋　幼児教育推進室長）